

# 花街のふたご

text by Shinji Ishii  
文いしいしんじ

前に書いたとおり、週に一度、スペイン語を習いにいっている。先生はカナダ人のジョンさん。場所は上七軒。北野天満宮の東に、こじんまりと軒を連ねるこの一角が、じつは京都でもっとも古い歴史をもつ花街だ。

朝九時半、京都市街の東部、京大近くの家をロードレーサーで出発する。鴨川を越え、堀川、千本通りを越えて、上七軒、と名の付く交差点に出る。なぜだかこの辺りには自転車屋さんが多く、僕のロードレーサーも、交差点近くのコセキサイクリングセンターにメンテナンスをお願いしている。

信号が青に変わる。ペダルを踏んで、いちばん細い道にはいる。狭い、と思ったのは最初だけで、足もとには石畳がリズムカルに近づき、両側には格子窓のついた京町家がならんでいる。

シンポジウム当日、僕はひとり、建物のまわりを二周、三周と歩いた。周囲のたび、敷地の広さや屋根の高さが、変わっていくような錯覚にとらわれた。だいたい、客席には何度もはいつたことがあるのに、入り口がどこにあるのか、ぜんぜんわからない。庭を掃き清めているおじさんに訊ね、ようやく、庭からじかに入れてもらえることになった。

古池。湾曲する朱色の橋。靴を脱いで木床にあがる。僕に気づいたスタッフが、「みなさん、楽屋でお待ちです」

と案内してくれる。足の下で床板がゆっくり、しなやかに、舌みたいになわむ。遠いようであつという間に部屋につながる廊下。畳敷きの楽屋の開放された入り口から顔を覗かせ、こんにちは、遅うなりました、と挨拶したら、山極さんが振り返って、オオウ、と笑った。竹宮さん、藤原さんの顔もみえる。

そこは広大な部屋だった。ちゃぶ台がいくつも果てしなく並び、思ってもみない数のひとが、あぐらを掻いたり正座したり、開演の時間を待っていた。僕は山極さんの左隣に回り込み、部屋の広さにあらためて驚嘆し、隅から隅までいったいどれくらいあるのか計つ

喫茶店から、シンプルな服装の若い女性があらわれ、青空に向けて、ふわあとひとつ、小さな風船みたいなあくびを漏らす。背筋を伸ばし、小股で調子よく歩いていく。ゆうべ遅かった芸妓さんかもしれない。

室町時代、一四四四年、北野天満宮を再建した残りの材木を使って、七軒の水茶屋が建てられた。これが上七軒のはじまり。どうして七軒だったんだろう。その後、西陣の発展にともなって勢いを増し、また、その西陣の停滞とともに静けさを保つようになった。

祇園や宮川町など、いまでも残る他の花街に比べて、奥ゆかしいというか、おだやかというか、どちらかというと大人っぽい印象がある。とはいえ、印象だけ。夜の店のなかなかんでぜんぜん知らない。そんな上七軒の朝を、自転車で抜けていく。少しずつ上り坂になっていて、交差点からわずかにあがるだけで、

てみようと、部屋の隅に目を走らせた。

と、空間がぐんにやり曲がる。めまいとともに新たな驚きに襲われ、その場で立ちあがると、楽屋の半ばまで歩を進める。むこうからも誰か歩いてくる。それは僕のふたご、ドッベルゲンガーだ。ぞつ、と肌が粟立つ。ドッベルゲンガーに会った人間は必ず死ぬ。「ここ、すごいだろ」と山極さんの声が後ろと前から響く。僕は立ちつくし、ゆっくりと右手をあげる。するとドッベルゲンガーは左手をあげた。僕は、これまでみたどんな湖水より深く、どんな氷より冷たく、どんな光より透명한、鏡の前に立っていた。楽屋のいっぽうの壁が、上七軒歌舞練場の楽屋は、まるまるすべて一

空気が青色に澄んでくる。この通りには電柱がない。空の青さがまっすぐ、通りの幅通りの、光の帯となって落ちかかってくる。上七軒は空につながっている、そんな気になる。

日々を送るうち、上七軒の「歌舞練場」の舞台にあがることになった。「北野をどり」は、二十年以上前から何度か見に行っているが、まさか男性の自分があんな華やかな高みにのぼる日が来るなんて、当たり前だが考えたこともなかった。

京大総長の山極寿一さんが企画したシンポジウム「物語はどう作られるのか」。メンバーは山極さん、漫画家の竹宮恵子さん、京大人文研の藤原辰史さん、そうして僕がスピーカーとして登壇し、それぞれ「物語」について喋る。会場案として歌舞練場を提案したのは運営スタッフのひとりらしい。

枚の鏡張りだ。

ただの鏡じゃない。何百、何千、何万の芸妓、舞妓さんの視線を浴び、念を呑み、照り返しつづけてきた、命をもつ鏡。

空だ、と僕はおもった。上七軒の上の空とこの鏡は、表と裏だ。女たちの見つめる目、未来、過去、遠いいのちを臨む目が、歌舞練場の壁全体にそれぞれの空を映した。僕は京都の「物語」そのものを目の当たりにし、そのただなかに、否応もなく映りこんでいた。



## 京都府京都市



面積: 827.83km<sup>2</sup>  
総人口: 1,466,937人(推計人口、2018年4月1日)  
人口密度: 1,772人/km<sup>2</sup>  
市の木: シダレヤナギ、タカオカエデ、カツラ  
市の花: ツバキ、ツツジ、サトザクラ  
自治記念日: 10月15日



### Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。著書に小説「ぶらんこ乗り」「麦ふみクーツエ」「ポーの話」「みずうみ」「四とそれ以上の国」など、エッセイ「人生を救え!」(町田康共著)「熊にみえて熊じゃない」「遠い足の話」、絵本に「赤ずきん」(ほしよりこ絵)など多数。